

「INTERNATIONAL HERALD TRIBUNE」 2012年2月23日

「時代の証言」をキュレーションする

Liza Foreman

大手女性下着メーカーのワコールが所有する、これといった特徴のない企業ビル。そこに世界有数の服飾コレクションが所蔵されていることを誰が想像するだろう。

あるいは、寺やすばらしい庭園、温和な僧侶たちに代表される京都という町のイメージとは明らかに対照的なその建物が、日本における服飾研究の第一人者の本拠地であることも。

とはいえ、京都服飾文化研究財団（KCI）のチーフ・キュレーターであり、理事である深井晃子氏は、もっぱら海外で開催される展覧会を企画することでキャリアを積んできた。ルーブル宮のパリ衣装芸術美術館から、彼女が手がけた画期的な展覧会「Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion」が開催されたロンドンのバービカン・アート・ギャラリーまで、活躍の場は広い。

2010年に開催されたこの「Future Beauty」展が、この夏、東京に巡回する。深井のいわば伝説的なキャリア（彼女の履歴書は7ページにもおよぶ）の頂点とも言える企画展である。

「私は過去30年間の日本のファッションの歩みを同時代人として見つめてきました」と、深井は語る。「私は日本のファッションとともに歩んできました。この展覧会を企画することは、時代の証言として必要であり、それが私の使命だと思っています。」

同輩のニューヨーク州立ファッション工科大学美術館のディレクター兼チーフ・キュレーター、ヴァレリー・スティール氏の説明は、若干だが違うようだ。「彼女は日本の観客に対して西洋のファッションの、ヨーロッパの観客に対して日本のファッションの内情を伝えてきました。それが彼女のファッション・キュレーターとしてのもっとも大きな功績だと言えるでしょう。」

深井氏は岡山の出身で、母親と高校教師の強い勧めで医学を学ぶために1960年代に上京。以来、東京を地元と呼んでいる。

特に気乗りもせず、また特別な理由もなく医学から一転、西洋衣装の歴史を学ぶことになったが、1968年に西洋服装史の修士号を取得する頃には、当時日本を席卷したファッションというものに心を奪われていたと言う。

「私は文献を読んだだけではなく、実際に洋服を見ながら学びました。とても一生懸命勉強をしましたし、展示作業や執筆活動にも全力を注ぎました。幸せな仕事だと思っています。」

そして、深井氏に決定的なインスピレーションを与えたのは、「Future Beauty」展の主題のひとつでもある、デザイナーの三宅一生氏であった。

「1970年代後半、日本においてファッションは活気に満ちていました。多くの才能ある日本人デザイナーが生まれたのもこの時代です。1977年頃だったと思いますが、私は東京で三宅一生のショーを見てファッションの世界に入ろうと決めたのです。文化的な側面から掘り下げるに値する世界だと感じたのです。」

その直後、1978年に深井はKCIの設立を報じた記事を目にする。それは「KCIの設立者および株式会社ワコールの創業者である故・塚本幸一氏の熱意に根差した支援と使命感によって」つくられた財団だった。

深井は、その仕事は自身にとって「まさにぴったりだった」と振り返る。

前述のスティール博士は続ける。「深井さんは早くから活躍していたキュレーターです。服飾に特化したコレクションはアメリカや、イギリスのヴィクトリア&アルバート美術館など数多くありましたが、彼女は美術史という専門を持ち、またファッションを視覚芸術とは違う応用芸術の一分野として明確に認識していたことで異彩を放つ存在となりました。ファッションを、本格的に研究されるべき応用分野のひとつとして捉えていたのです。」

以来、深井は服飾資料の収集に努め、現在の収蔵品は服飾資料1万2千点、文献資料1万6千点にのぼる。また、収蔵品を網羅する「デジタル・アーカイブス」も公開している。

KCIのコレクションの4分の3を、西洋の服飾資料が占める。これは、「西洋の服装に通ずる、近代日本の服装のルーツを紹介する機関が国内になかった」という深井のキュレーターとしての見識に基づく収集方針だ。

それに加え、「近頃日本では、みな洋服しか着ないから」という理由もあるそうだ。

コレクションは、バレンシアガ95点、シャネル60点と多岐にわたる。1990年代には、コム・デ・ギャルソンが1千着を同財団に寄贈した。また、収蔵品の中でもっとも高価なものは、エリザベス1世のためにつくられたが女

王自らが着ることを拒否したとされる装飾的なボディスだ。

「彼女は素晴らしいオートクチュールのコレクションを築き上げてきました。1980年代の初め頃からポール・ポワレといったデザイナーたちの作品を買い始めたのです。」そう語るスティーブル博士だが、個人的には「KCIのコルセットのコレクションは垂涎もの」だと言う。

しかしながら、開館以来 KCI には大規模な展覧会を見せる物理的なスペースがない。そのため、深井のこれまでの活動は巡回展や外部機関の展覧会に協力することが多かった。

デザイナーデュオ、ヴィクター&ロルフのヴィクター・ホルステイングは、バービカン・アート・ギャラリーで開催された自身の回顧展のために KCI から作品が貸し出された時のことをこう振り返る。「白手袋をした KCI のガードマンが作品にぴったりとついていて、僕らでさえ作品に触れることは許されませんでした。アイロンをかけることも、触れることも、動かすこともできなかったんです。」

「でもそれは本当に気分のいいことでした。彼らにとって僕らの作品は、即座に歴史の一部として認識されていたわけで、それは実に嬉しいことでした。」

実際の KCI のコレクションは、大きな部屋に整然と並ぶ何列もの白い衣裳棚に制作年別にファイルされている。残りのスペースは研究室となっており、マネキンや昔風のミシンでいっぱい補修室や、小さな展示スペースがあり、最近では女性用下着を紹介していた。

深井が KCI のキュレーターとして駆け出しの頃に初めて手掛けた展覧会は、1980年に近隣の京都国立近代美術館で開催された「浪漫衣裳展 1835-1895」である。

それを皮切りに、ルーブル宮のパリ衣装芸術美術館で開催された「華麗な革命—ロココと新古典の衣裳」展（1991年）、京都、東京、そしてニューヨークのクーパー・ヒューイット国立デザイン博物館を巡回した「COLORS ファッションと色彩—VIKTOR&ROLF&KCI—」展（2004、2005）、マドリードのスペイン国立衣装美術館で開催された「Modachrome」展（2007）など、いくつもの企画を打ち出してきた。

個人的にもっとも印象に残っているのは？との問いには、「1996年にパリで『モードのジャポニスム』展が幕開けした時です。」同展はその後、京都、

パリ、ロンドン、ニューヨーク、東京、ロサンゼルス各都市を巡回した。

そのカタログの序文で深井は欧米に日本美術が及ぼした影響を考察するが、まずひとつ目の例として、「オートクチュールの創始者（シャルル・フレデリック・）ウォルト（1825-1895）のケープには、日本の兜が横向きに刺繍されている」ことを挙げる。¹

また、西洋ファッションの中で「ジャポニスム」がもっとも顕著に現れたのはマドレーヌ・ヴィオネのデザインだと言う。

「マドレーヌ・ヴィオネのドレスに、恐らく誰も直截的に日本的なものを感じはしまい。しかし、それはまた、私たちに限りなく着物の平面性、構造を彷彿させるのであった。」²

近頃深井は、洋服そのものよりもその着装に興味があると言う。

「今のファッションにはすべて既視感を覚えます。シャネル・スーツやイヴ・サン・ローランがディオールで発表したトラペーズ・ドレス、クレージュのミニスカートなど。新しいデザインが生まれる時代ではないのです。」深井は続ける。「しかし、洋服の着方はまったく新しいものになりつつあります。」

「今の人たちの着こなしは、伝統的なそれとはまったく違います。彼らは古い習慣から解放され、既存のものを独自のフレッシュな感覚で着こなしていると思います。」

深井自身のスタイルはというと、日本人デザイナーによるものを取り入れてはいるが、先日行われた東京コレクションでのインタビュー時には、ややおとなしめのチュニック・スタイルのレインコートにスラックス、シルクのスカーフに短めの黒髪というものだった。一風変わった角張った眼鏡についてのこちらの質問はほとんど相手にせず、すぐさま着席した後、きびきびと仕事の話だけをするという印象であった。

（付け加えるなら、数ヶ月後に再会した時に着ていたものを尋ねたところ、それがどこのものであるかを彼女はまったく覚えていなかった。最近彼女はウェブ上の『Dazed Digital』誌の中で、日本のファッションの未来は「手頃な価格で手に入るベーシックな洋服」に集約されるという見解を述べているが、そ

1 深井晃子、『モードのジャポニスム』、京都服飾文化研究財団編集、東京クリエイションフェスティバル実行委員会、1996年。p.16。かっこ内は訳者注。

2 同上。

れに似た姿勢だったと言えるかもしれない。)

「シャネル・スーツは一着持っていますが、私らしい感じがしないので結局一度も着たことがありません」と、深井は言う。彼女がもっとも気に入っているのは、川久保玲によるコム・デ・ギャルソン 1997 年春夏コレクション「Lumps and Bumps」のカジモド・ドレスだそうだ。

キュレーターたちも深井のファッションセンスには一目置いている。「梟子は歴史的なドレスにもコンテンポラリー・シックなセンスで臨む人。」そう語るのは、ニューヨーク・メトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートのハロルド・コーダ氏だ。「初めて会った時、彼女はコム・デ・ギャルソンや三宅一生を身に纏い、アカデミックな学者や美術館の専門職に就いている人というよりは、どこかのファッション・エディターのように見えました。紺色のブレザーやヘザーっぽいツイードといったぼやけた印象の服を着ている他の美術館キュレーターたちに対し、彼女は端正なヘアスタイル、真っ赤な口紅、エキセントリックなひだ飾りが施された黒いジャージー素材のチューブ・ドレスという姿で現れ、それは文字通り、感嘆符のように目を引く姿でした。」

さて、「Future Beauty」展は、深井が4年前に静岡文化芸術大学大学院の文化政策研究科長、教授の職を退いてから主力を注いできた活動のひとつだ。

現在は、シンポジウムや講演会のために世界中を飛び回っている。例えば、3月にはヴェネツィアでダイアナ・ヴリーランドについてのレクチャーを行う予定だ。その合間を縫って、7月28日に東京都現代美術館で開幕する「Future Beauty」展をヴァージョンアップすべく、新進の日本人デザイナーたちを発掘する作業も行っている。同展はその後、2013年にシアトルで開催される予定だ。

この展覧会にさらに新しい息を吹き込むことは、大学を辞めた後の深井のプロジェクトのひとつである。「これからは研究のために、また私にとってもっとも大切な財団に焦点を当てて、活動をしていきたいと思っています。それからいくつかの夢も実現したい。」

その夢の中には、西洋美術に着物が与えた影響についての本の執筆（KCI が所蔵する着物は30点しかないが）と、ファッションとアートを並列で考察する展覧会の企画などが含まれている。

深井は語る。「知識とは複雑なものです。私が他の人より知識を持っている

かどうかは分かりませんが、日本のファッションについての知識は豊富です。それだけは言えると思います。」

写真キャプション1：

京都服飾文化研究財団の深井晃子氏が手掛けた画期的な展覧会「Future Beauty: 30 Years of Japanese Fashion」。写真はロンドンのバービカン・アート・ギャラリーでの展示風景。

写真キャプション2：

京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーターおよび理事の深井晃子氏。

写真キャプション3：

「Future Beauty」展より、川久保玲によるコム・デ・ギャルソンの1点。同メゾンは KCI に1千着を寄贈している。

翻訳：河野晴子